２０２４．１０．６（日）使徒１９：１１～２０

19:11 神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。
19:12 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどであった。
19:13 ところが、ユダヤ人の巡回祈祷師のうちの何人かが、悪霊につかれている人たちに向かって、試しに主イエスの名を唱え、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみた。
19:14 このようなことをしていたのは、ユダヤ人の祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。
19:15 すると、悪霊が彼らに答えた。「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、おまえたちは何者だ。」
19:16 そして、悪霊につかれている人が彼らに飛びかかり、皆を押さえつけ、打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家から逃げ出した。
19:17 このことが、エペソに住むユダヤ人とギリシア人のすべてに知れ渡ったので、みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになった。
19:18 そして、信仰に入った人たちが大勢やって来て、自分たちのしていた行為を告白し、明らかにした。
19:19 また魔術を行っていた者たちが多数、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を合計すると、銀貨五万枚になった。
19:20 こうして、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった。

＜説教＞

本日の聖書箇所にもパウロの第３回伝道旅行中、エペソでの出来事が記されています。エペソでパウロはまずユダヤ人の〈会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努め〉ました(8)。〈しかし、ある者たちが心を頑なにして聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞〉きました(9−10)。エペソを中心としたパウロのことばによる宣教は〈神の国について〉の宣教、〈主のことば〉の宣教でした。それは第２回伝道旅行のときのコリントでの宣教と同じように、〈説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるもの〉（Ｉコリント 2:4)、つまり神の力によるものでした。もちろんパウロはエペソやコリントだけに限らす、どこでもいつでも神の力によって〈主のことば〉を語り、行動したのです。パウロはいわば神の手足、道具として主イエス･キリストを宣べ伝えました。主イエス･キリスト、神がパウロをそのようにお召しになりました。パウロの宣教は神の力の現れでした。

だから神が〈パウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われ〉(11)ました。もちろんこれまで見て来たパウロ以外の、ペテロやピリポといった使徒たち、伝道者たちによる「奇跡」のわざも神が彼らの手によってわざを行われたものでした。しかし、エペソでのパウロを用いた神のみわざは〈驚くべき力あるわざ〉でした。

それがどれほどのことだったかというと、〈彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほど〉(12)でした。パウロが直接手を触れることができなくても、誰かがパウロが身につけていた〈手ぬぐいや前掛け〉を持って行って〈病人たちに当て〉たのでしょう。すると〈病気が去り、悪霊も出て行〉ったのでした。〈手ぬぐい〉はパウロが汗を拭くための道具、〈前掛け〉はパウロが天幕を作るときの道具でした。そんな物も神が人から〈病気を去〉らせ、〈悪霊も出て行く〉ためにお用いになったのです。神がなさろうとのみこころなら、なんでもできます。神がお用いになろうとのみこころなら、人でも物でも、何でもお用いになることができます。それが神の力です。人の目には、パウロが語ったり行ったりしたことによって、またパウロの力が物に乗り移ってることによって〈驚くべき力あるわざ〉が行われたように見えました。しかしパウロの「ことば」や「行い」や「持ち物」そのものに力、魔力があって威力を発揮したのではありませんでした。どこまでもただ神の力によることでした。パウロはただ神の力を現すため、証するために信仰をもって神のため、主イエス･キリストの栄光を現すために働き、神に用いられた神の道具、神のしもべでした。あがめられ、恐れられ、信じられるべきお方、人を救う力あるお方はただ神、主イエス･キリストだけです。大事なのは、その力ある神、主イエス･キリストへの信仰です。そのことが明らかにされるための出来事が 13−16 節に記されています。

当時〈ユダヤ人の巡回祈祷師〉なる人々がいました。そういえば、サマリアの町にはシモンという名の魔術師がいました（8 章)。またキプロス島にはバルイエスというユダヤ人魔術師もいました（13 章)。さて〈ユダヤ人の巡回祈祷師〉たちも誰かの「名」を唱えて悪霊追い出しの祈祷を行っていたようです（ソロモンとかアブラハムとかまたは神の名とか)。〈スケワという人の七人の息子たち〉はここで〈悪霊につかれている人たちに向かって、試しに主イエスの名を唱え、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみた〉のです。パウロが行っていた「驚くべき力あるわざ」(11−12)を見聞きしてのことだったに違いありません。しかし結果は散々なものでした(15−16)。

神、主イエスは、パウロのときとは違い、彼らを通しては力を現しなさいませんでした。なぜなら、彼らには主イエスに対する信仰がなかったからです。パウロは信仰によって〈主イエスの名を唱え〉、主イエスを〈宣べ伝えて〉いました。だから〈神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた〉のです。しかし、主イエスを信じる信仰のなかった彼らがしたことは、ただの「猿まね」に過ぎませんでした。

そのように、この〈ユダヤ人の巡回祈祷師〉〈スケワという人の七人の息子たち〉の考え、言動は実に愚かなものでした。それは悔い改めるべきことでした（その後彼らが悔い改めたかどうかは分かりません)。しかし、神はこの出来事をもご自身の力をもってお用いになりました。〈このことが、エペソに住むユダヤ人とギリシア人のすべてに知れ渡ったので、みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになった〉(17)のです。「パウロの宣べ伝えているイエス」と祈祷師たちは言いました。また悪霊は「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている」と言いました。不信仰者や悪霊の言葉でした。それでもその話を聞いた〈エペソに住むユダヤ人とギリシア人〉は、「パウロの宣べ伝えているイエス」とはどんな方なのだろうと思い、「イエスのこと」「パウロのこと」を知りたいと思うようにもなったのではないかと思います。悪霊の言葉の裏には、悪霊もイエ

スやパウロには逆らうことができず、恐れている、そんな思いもうかがえます。

さてそういうわけで、〈恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになった〉人々の中から主イエス･キリストを信じる〈信仰に入〉る人々を神は起こされました。更に彼らはことばと行いをもって信仰を告白し、証することとなりました(18-19)。それは彼らのうちに〈神の国〉すなわち神の支配が到来したこと、〈主のことば〉(20)（とともに聖霊）が力をもってお働きを始められたことの現れでした。〈自分たちのしていた行為を告白し、明らかに〉(18)する、こういう具体的な悔い改めは神の力によらなければ、人間の力ではとても恥ずかしく、また恐ろしく、そしてプライドが邪魔をして、とてもできないことです。〈値段を合計すると、銀貨五万枚〉（おそらく数百万円相当）もの魔術の〈書物を持って来て、皆の前で焼き捨て〉ることも、相当の覚悟がないとできなかったことでしょう。後にパウロは「益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです」とエペソ教会の長老たちに言います(20:20-21)。こういうパウロの〈主のことば〉による教育と訓戒があり、更に聖霊がお働きになって人々の心を動かされたが故に、18-19 節に記されたような、〈信仰に入った人たち〉の具体的な信仰と悔い改めの告白、そのこととばと行いがなされたのです。

これがエペソに住むユダヤ人とギリシア人に〈主のことば〉が聖霊とともに〈力強く〉(20)お働きになった結果でした。私たちも何よりもまず主イエス･キリストを信じましょう。そして〈主のことば〉と聖霊の導きに聞き従い、〈暗闇のわざ…ひそかに行っていること〉（エペソ 5:11-12)を告白し、捨てましょう。〈主イエスの名〉があがめられ、〈主のことば〉が〈力強く広まり、勢いを得て行〉くために、主に用いていただきましょう。